

保育者養成校におけるピアノ指導法

—アンサンブル曲に着目して—

Piano Teaching Methods in Preschool Teacher Education Programs

—Focusing on Ensemble Music—

横 溝 聡 子*

Toshiko YOKOMIZO

Preschool teacher education programs require piano lessons as part of their curriculum. There is always research that focuses on finding teaching methods that are efficient and effective for beginner students, but with the recent change in student quality, there is a need for further improvement of the curriculum. This current study looks at the ensemble music pieces that are used in the textbook and analyzes the best teaching pace and content for further improvement of self-expression when playing. It is predicted that there will be a positive educational effect by teaching not only solos but also ensembles from an earlier period.

1. はじめに

郡山女子大学短期大学部幼児教育学科は、昭和30年に保育科として設置されて以来、63年の時を経てきた。保育者養成校としてのピアノ指導も長年の経験の積み重ねにより、現在の指導体制や指導方法が確立されてきている。筆者は、昨年度郡山女子大学における紀要第54集において、「保育表現技術 器楽Ⅰ」の授業で使用している『ピアノ・テキスト』¹⁾の独奏曲を取り上げ、幼児曲「生活の歌」を演奏するのに必要な具体的な技術的要素がどのようにテキストの指導内容と対応しているのかを検証した²⁾。その結果、『ピアノ・テキスト』の曲は、ピアノ演奏に必要な知識や技術を学修するための内容が順を追って効果的に配置されており、その身に付けるべき学修内容と、「生活の歌」を演奏するために必要な技術的要素の関連性が明らかになった。教員は、その関連性を明確に意識しながら指導することで、学生の理解力向上や、学修への意欲を喚起する効果を得られると思われる。しかし、多くの先行研究でも問題となっているように、本学でも半数以上の学生がピアノ初心者、もしくはピアノ経験が浅いため、次々と難しくなるテキストの課題に十分対応しきれない状況が見られる。更なる効率的かつ効果的な指導方法を探る時、新たな取り組みが求められることは当然であろう。これまで、独奏

* 音楽科

曲について研究を行ってきたが、本稿では『ピアノ・テキスト』の中のアンサンブル曲について新たな角度から分析を試み、より効果的な指導方法の在り方を考察していきたい。

2. 「保育表現技術 器楽Ⅰ」における現状と課題

本学幼児教育学科では、1年次の必修科目として「保育表現技術 器楽Ⅰ」においてピアノの指導を行っている。学生は、90分1コマの授業を45分ずつ個人レッスンとML（ミュージックラボラトリー・システム）を使用しての集団レッスンを受けることになっている。平成30年度の履修者は148名であり、1クラス37名に対し、1名の教員がMLで集団レッスンを行い、5名の教員が個人レッスンを担当している。授業ではドレミ楽譜出版社の『幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト 改訂版 ーレッスン24とその応用ー』（以下、『ピアノ・テキスト』と表示）を使用している。『ピアノ・テキスト』は、基礎学習のためのLesson1からLesson24までの「基礎曲」、そして、「応用〔そのⅠ〕参考曲」と「応用〔そのⅡ〕表現のための音楽」の3つの部分で構成され、全121曲のうち独奏曲は96曲、アンサンブル曲は25曲である³⁾。1年間の学習でLesson12まで、2年間でLesson24まで到達することを目標として編纂されているテキストであり、本学でも1年次にLesson12までは終了させることが必須となっている。アンサンブル曲はMLでⅡ期⁴⁾になってから抜粋した7曲を学習している。現在、初心者に対する個人レッスンでは、Ⅰ期は『ピアノ・テキスト』の独奏曲のみを取り上げて指導を行っている。Ⅱ期はこれに「生活の歌」が5曲必修課題となる。MLでは、Ⅰ期のうちからアンサンブルを取り入れた指導をしていた時期もあったようである。しかし、ここ十数年は学生の質の変化によりⅠ期のMLでの学習は、個人レッスンに対応するための基礎的ピアノの演奏法という扱いにし、ML担当教員は主に初心者に対して補足的な指導を行っている。Ⅱ期に入ると、前述の通りMLでは「生活の歌」と、ピアノ・テキストの中のアンサンブル曲の指導が行われている。ML教室で使用している楽器は、ヘッドホンの都合上1台の楽器は2名までの使用である。その為、アンサンブルは連弾のスタイルでの授業となっている。

学生のピアノ学習歴は個人差が大きく、その進度や能力は様々である。保育者養成校におけるピアノ初心者が抱える問題点について中山(2007)⁵⁾は読譜力が鍵であると述べ、そこでの調査で、ヘ音記号による読譜、拍子、リズム、音楽用語、調号、臨時記などの理解ができていない学生が70%を超えている。また、藤原(2018)⁶⁾は、楽譜情報の音高への変換、鍵盤の位置の把握、指間隔の調整、指の独立、手の大きさや指関節などの問題点を挙げている。本学の学生にも全く同じ問題点が当てはまっている。この様にピアノ演奏法の修得には、音楽理論の理解、読譜や鍵盤への理解、指や手・身体的な問題解決など様々な知識や意識が必要で

ある。その為には多くの課題に取り組むことや繰り返し練習が必要である。一般的にピアノ初心者は、ある程度多くの曲数に取り組みながら少しずつ難易度を上げていくのが理想的である。ピアノ初心者の学生は新しく身に付けるべき演奏技術を修得するのに時間がかかるケースが多く、指導にも苦慮するところである。特に導入部のLesson 5 辺りまでは、指を独立させて動かすことや左右違った動きに学生たちは苦勞している。一つの課題に慣れさせるような類似の課題や、ピアノを弾くということに慣れるために楽しんで取り組める課題も必要だと感じている。

3. アンサンブル曲

アンサンブル(連弾)による効果について梁島ら(1993)⁷⁾は、「学習意欲を回復したり、高めたりする効果も大きいといえる。ともすればテクニックにとらわれがちな独奏曲に比べると、自由で伸々とした音楽表現が得られ、個人のテクニク的な弱点よりも、むしろ音楽的長所が生きた演奏になる点は注目される」と述べている。時間的な制約がある中で、多くの課題をこなしていくことは難しい面もあるが、『ピアノ・テキスト』の随所に盛り込まれているアンサンブル曲の扱い方をもう一度見直してみることで、より学修効果を高めることができなだろうか。『ピアノ・テキスト』のLesson 3 からLesson 24 (以下L24などと表示) までのアンサンブル曲22曲を取り上げ、それぞれの曲について、演奏技術面などどのような学修すべき内容で構成されているのかを具体的に見ていくこととする。

L 3-11 メリーさんのひつじ(アンサンブル) (譜例1)⁸⁾

この曲は4声部に分けて編曲されている。楽譜下部にはワンポイントアドバイスとして、「この曲もいろいろな組み合わせでアンサンブルをしてみましょう」と書かれており⁹⁾、パートの組み合わせ方によって様々なアンサンブルができるようになっている。I の

(譜例1) メリーさんのひつじ

パートは主旋律である。L 3-10までの学習ではト音譜表はa～gの音域を使用している。この曲で初めてc²～g²の音域の使用となる。また、新たに付点4分音符のリズムも現れる。しかし、誰もが知っている楽曲のため導入はスムーズにできるであろう。IIのパートはg¹～c²の音域を使用し全て全音符である。右手用の指使いが書かれているが、2人で2段ずつ担当して

演奏する場合は指使いに関して指導する必要がある。Ⅲのパートはh～e¹の音域を使用し、前半は伴奏の役割を担い1拍目が4分休符、2～4拍目は4分音符でリズムを刻む。後半は主旋律になる。ⅣのパートはG～cの音域を使用し、前半が全音符の動き、後半はⅠ（ドミソ）とⅤ（シレソ）の和音での4ビートの伴奏パターンになる。アンサンブルで演奏する場合は、正確に拍子を感じながら演奏する基本的な能力を養うことができる。4つのパートそれぞれの動きやハーモニーを感じることで、アンサンブルの楽しさも得られる。各パートはさほど難しくなく、様々な曲でよく使用される動きやリズムパターンで楽しくかつ高い学習効果が得られる。

L 3-12 きらきらぼし（アンサンブル）（譜例2）

この曲も4つのパートに編曲されている。ワンポイントアドバイスにはⅠ・ⅡとⅢ・Ⅳに分けて2名で演奏することも推奨されている¹⁰⁾。ABAの3部形式である。Ⅰのパートは8^{va}が付されてc³～a³の高音域を使用している。Aの部分は主旋律で、ここで初めて1と4の指の間での5度の開きや同音の指の交替も行われる。Bの部分は対旋律としての役割を担う。Ⅱのパートはやはり8^{va}が付され、c²～a²の音域を使用する。2度から5度と音の幅が変わる動きの学習で初心者にとってはやや難しい。

Ⅲのパートはc¹～a¹の音域を使用している。6度の開きが初めて出てくる。A部分は4分音符と8分音符のリズムで主旋律の対旋律的な動きをしている。不規則な動きが多いため、初心者にとっては指使いの面で複雑さを感じさせ、難易度がやや高い。B部分は主旋律を受け持つ。ⅣのパートはE～cの音域で付点2分音符と4分音符のリズムである。1と3の指での4度の開きと、そこから3度下がって発生する6度の開きが現れる。ⅠからⅣのパートは個々に独立した複雑な動きでⅠとⅡ、ⅢとⅣの2パートをそれぞれ1人で演奏することはL3の学習段階ではかなり難易度が高い。

（譜例2）きらきらぼしA部分

The image shows a musical score for the A section of 'きらきらぼし' (Twinkle Twinkle Little Star). It consists of four staves labeled I, II, III, and IV. Staff I is the highest part, marked '8va', with notes on a treble clef staff. Staff II is also marked '8va' and is on a treble clef staff. Staff III is on a treble clef staff. Staff IV is on a bass clef staff. The score includes fingerings (1, 2, 3, 4) and dynamics such as 'Fine' and '2nd time only'. The key signature has one flat (B-flat) and the time signature is 4/4.

L 4-10 ぶんぶんぶん（アンサンブル）（譜例3）

この曲も4つのパートに編曲されている。Ⅰのパートはc²～g²の音域で主旋律を担当する。Ⅱのパートはc¹～g¹の音域で対旋律の役割を持つ。5の指と他の指の交互の動きの学習になる。Ⅲのパートはc～gの音域を使用し、ⅠとⅤ、Ⅴ₇の和音の学習である。L4-5「大きな栗の木の下で」ですすでにⅠ、Ⅴの和音は学習済みであり、新たにⅤ₇が加わる形である。Ⅳの

パートはG～cの音域を使用する。

Ⅲのパートと重なる音が多いため、このまま4パートを1台のピアノで演奏する場合は、もう1オクターブ下げるなどの工夫が必要と思われる。よく知られている曲のため取り組みやすく、楽しめる。基本的な学習内容ばかりであるため、全パートを練習し、パートを入れ替えながらアンサンブルにするのも効果的であろう。

(譜例3) ぶんぶんぶん

Musical score for 'ぶんぶんぶん' (Bunbunbun). It consists of four staves labeled I, II, III, and IV. Staves I and II are in the treble clef, and staves III and IV are in the bass clef. The music is in 4/4 time and features a simple melody with accompaniment.

L 4-11 ハッピー・バースデー・トゥー・ユー (アンサンブル) (譜例4)

へ長調とアウフタクトが初めて現れる。調性感や3拍子の拍子感を養う。I (1・2)のパートは1オクターブの開きで主旋律である。3のパートはe～des¹の音域を使用し、1拍目が4分休符の伴奏形である。和音としてはIとV₇の使用が主である。この音域はL 4-7、8の「階段にちゅういI・II」で学習しており、その定着のために良い練習となる。へ長調のbと臨時記号が付いたdesの学習になる。4のパートはF～fの音域を使用する。最後にオクターブの動きが出てくる。指使いの設定の工夫が必要である。L 4の段階では2人での演奏が可能と思われる。へ長調の調性感、アウフタクトで始まるフレーズの取り方やフェルマータの部分の互いの呼吸合わせなど、表現力を養うための基礎的な学習にもなっている。

(譜例4) ハッピー・バースデー・トゥー・ユー

Musical score for 'Happy Birthday to You'. It consists of four staves labeled I, II, III, and IV. Staves I and II are in the treble clef, and staves III and IV are in the bass clef. The music is in 3/4 time and features a simple melody with accompaniment.

L 4-12 新世界より (アンサンブル) (譜例5)

ワンポイントアドバイスにある通り、この曲は基本的には2人用で書かれているが、各パートの組み合わせ次第で1人から4人まで自由に設定ができる¹¹⁾。Iのパートは1オクターブの開きでの主旋律である。これまで高い音域は

(譜例5) 新世界より

Musical score for 'New World'. It consists of two staves labeled I and II. Both staves are in the treble clef. The music is in common time (C) and features a complex melody with accompaniment.

8^{va}を使用してきたが、ここで加線によってc³～g³の音域が表記され、高音部の音符表記に慣れる学習になっている。付点4分音符と8分音符のリズムが中心的である。Ⅱのパートは伴奏である。右手はI・Ⅳ・Ⅴ₇などの和音を全音符と2分音符で演奏する。後半部分は半音階的に変化していく動きが現れる。左手部分はオクターブの同音連続になっている。手を開くことに慣れておらず手の支えができていない学生が多いが、オクターブに慣れるための練習になる。音域はF₁～cまでで、低い音域が使用され、低音も加線で表記されている。4ビートの刻みと付点のリズムのアンサンブルをすることにより、それぞれのリズムを正確に感じる力を養うことができるであろう。また、加線の意味を理解し、慣れるきっかけとなる。

L 5-3 小鳥のうた(連弾) (譜例6)

左ページにSecondo、右ページにPrimoが置かれ、標題の表記にある通り完全に連弾のスタイルの楽譜になっている。Primoはオクターブの開きで旋律を主に担当す

(譜例6)小鳥のうた Primo



るが、最後の部分は伴奏の動きになる。Secondoは3拍子のワルツのリズムで、IとⅤ₇の和音が使用されている。最後の部分はオクターブの開きで旋律を担当する。スラーとスタッカートの学習にもなっている。左右並行した動きや左右右と動く伴奏パターンは、ピアノ学習の初期段階でしっかり身に付けるべき演奏技術の一つである。L 6-1 「かわいいオーガステン」を弾くための導入的な役割を果たすことができる。

L 5-4 歓喜の歌(アンサンブル) (譜例7)

3声のアンサンブルである。初めてト長調が登場する。全体的にレガート奏法が必要である。理論的な学習内容も多く含まれている。Ⅰのパートはg¹～d²の音域を使用し、主旋律を担当している。ト長調であるが、黒鍵の使用はない。

(譜例7)歓喜の歌



Ⅱのパートはh～h¹を使用し、対旋律的な動きである。左手用の指使いが書かれている。指ぐりや指またぎなどでのポジション移動が多い。調号のfisだけでなく臨時記号による黒鍵の使用が頻繁でやや難易度が高い。Ⅲのパートはバスらしい動きで低音域を担当している。音域はD～gで上のパートより更に広い音域を使用し、同音での指の置き換え、指またぎ、手を広

げて使う動きや指の持ち替えなど新たなテクニックの学習でやや難易度が高い。3声がそれぞれ独立した動きをしている事や、新たな学習内容が多く含まれているため、初心者にとっては、1人で2パートを担当するにはかなりの学習時間が必要と思われる。L5の段階では、1パート1人でのアンサンブルが最適と考えられる。

L 6-2 アラビアの歌(連弾) (譜例8)

イ短調の連弾曲である。ABAの3部形式である。Primoは右手が $a^1 \sim e^2$ 、左手が $a \sim e^1$ の5度の音域を使用し、手のポジションを固定したまま演奏できる。A部分は2小節にまたがってタイで保持される5度の和音の伴奏に、付点の動きが入った主旋律を演奏する。B部分はオクターブの開きで同じ旋律線を奏する。左右並行した動きである。Secondoは右手が最初から最後までe音のみである。A部分は4分音符、B部分は4分休符と2分音符のリズムである。左手はA部分ではA音で拍を刻み、B部分はE音で付点2分音符。初心者にとって弾きやすく基本的な演奏技術の定着に役立つ曲である。L6のレベルでは、この曲は技術的にある程度余裕を持って楽しみながら演奏できる曲といえよう。

(譜例8)アラビアの歌 Primo A部分



L 7-2 かわいいポルカ(連弾) (譜例9)

アウフタクト始まりで2部形式の連弾曲である。Primoは、前半が単音の左手の伴奏の上に右手が8分音符で動く旋律を担当する。後半は左右の並進行と反進行が現れる。右手

(譜例9)かわいいポルカ Primo



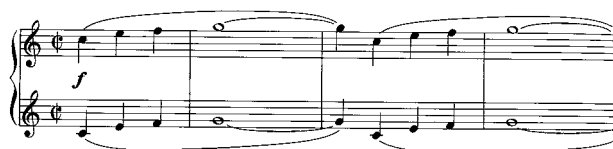
は $d^2 \sim c^3$ までを使用し、ポジション変化や指を変えていく同音連打がある。左手は $e^1 \sim c^2$ の音域で3と2の指が3度の開きで動く部分がある。後半部分でのポジション移動や指使いの変化は若干複雑である。最後に半音階的な動きが出てくる。Secondoは左右の手を交互にスタッカートで奏する。IとVの和音のみで構成されている。ポジション変化や指使いなど多くの課題が含まれている曲である。

L 8-2 聖者の行進(連弾) (譜例10)

2分の2拍子。1拍目の裏拍から始まるアウフタクトである。Primoは主旋律を担当し、右手は $c^2 \sim g^2$ 、左手が $c^1 \sim g^1$ の5度内を並進行で動く。Secondoは左右交互に動く伴奏で、7

小節目ではシンコペーションのリズムが使用されている。リズムの取り方に新しさはあるが、使用されている音域が慣れた音域であること、そしてポジション移動や左右の手の複雑な動きがほとんどなく、また、良く知られている曲であるので、もう少し早い段階で学習することも可能である。

(譜例10) 聖者の行進 Primo



L10-4 きつつき(連弾) (譜例11)

Primoは右手に8^{va}が付され、a²～d³の音域を使用し、ポジション移動はない。B部分で臨時記号が使用される。左手はA部分では1拍目に4分音符、2、3拍目は休符のリ

(譜例11) きつつき Primo A部分



ズムと、B部分では付点2分音符で3拍伸ばし、かつレガートで右手と並進行の動きになる。音域はA部分がh¹～d²、B部分がfis²～a²でポジション移動が行われる。Secondoは伴奏を担当している。使用されているのはIとV7、V度調のVである。A部分はワルツのリズム。Da CapoでAに戻った時は8^{va} bassaで演奏する。B部分は右手が分散和音になる。左手はD～dの音域を使用する。さほど難易度は高くない。

L11-2 幸せなら手をたたこう(連弾) (譜例12)

Primoは付点のリズムが支配している。右手の音域はd²～c³で、4度、5度、6度と手を広げていく動きがある。広い音域を動くためポジション移動をスムーズに行うための

(譜例12) 幸せなら手をたたこう Primo



指使いの工夫が必要である。SecondoはIとVの和音のみで、付点2分音符や全音符での動きである。右手は3度と左手のレガート奏法が求められている。拍子やリズムを正確に取り休符や強弱の表現の学習になっている。幼児曲では付点のリズムが多用されているため、この奏法を身に付けるためには良い課題である。

L12-1 ヤンキー・ドゥードゥル(連弾) (譜例13)

9小節目でハ長調からニ長調に転調する。ニ長調の登場は初めてである。Primoは全体的に

スタッカートが支配しているが、部分的にスラーが

かかれており、その違いを明確に意識する必要がある。動きが速く、左右違った様々な動きがあるため、

L12の段階では難易度が高い。Secondoは、冒頭から8小節間は同音連打が続く。9小節目以降は右手

が重音になっており、タイやスラーが多く使用され、二長調ということもありやや難しい。強弱記号の変化から、曲の表情を変化させる学習にもなっている。

(譜例13) ヤンキー・ドゥドゥル Primo



L13-2 アビニョンの橋の上で(連弾) (譜例14)

Primoの右手部分は8分音符、4

分音符そして付点のリズムの動きである。8分音符と付点のリズムの違い、同音連打の指の交替、ポジション

変化などが課題である。左手部分はIとV、V₇の和音の伴奏になっている。SecondoはIとV₇の和音での伴奏。9小節と11小

節目にアルペジオが出てくる。ABAの3部形式で同じ形が繰り返されることから、L13の段階で十分楽しみながら演奏できる曲である。

(譜例14) アビニョンの橋の上で Primo



L14-4 イタリア奇想曲(アンサンブル) (譜例15)

大譜表3段の楽譜である。3台の楽器が必要となる。へ長調。IとIIのパートの初めの

部分は掛け合いになる。その後12小節から3度の幅で旋律を演奏する。21小節からは左手の和音はほぼ同じで音が重なっている。IIIの

パートは和音でワルツのリズムを担当する。

(譜例15) イタリア奇想曲19~22小節



L15-2 バトントゥアラール (6手連弾) (譜例16)

この曲は1台のピアノでの演奏が可能である。各パートそれぞれ1段の楽譜で始まる。それぞれのパートは主旋律や対旋律、伴奏の

役割が4小節毎に入れ替わる。はじめの4小節はIとIIIが同じ動きでIIは16分音符の入った旋律線である。5~8小節はIIの左手とIIIの右手が同じ動き、9小節目からはその動きにもう一

方の手で裏拍に伴奏のリズムを刻み、IはIIが4小節目まで奏していた16分音符の入った旋律線と同じ動きをする。アンサンブルが楽しい曲である。

(譜例16) バトントゥアラー

L16-3 タウベルトの子守歌 (連弾) (譜例17)

8分の6拍子。主旋律はSecondoから始まり、7小節目からPrimoへ移行する。再び9小節目からSecondoが主旋律を担当し、すぐ11小節目

(譜例17) タウベルトの子守歌 Primo

でPrimoに主旋律が移る。Primoは両手ともに旋律的な動きであるが、Secondoは左手が分散和音の伴奏で、その上に旋律を奏する。使用する音域も広くなり、強弱変化やテンポの変化、ペダルの使用、役割交替による音量バランスの意識など、表現に工夫が求められている。

L17-3 大きな古時計 (連弾) (譜例18)

Primoが主に主旋律を担当しているが、13小節から16小節はSecondoに主旋律が移動する。Secondoには対旋律的な動きや時計の時を刻むような音の模倣など、様々な表情で音楽に彩りを添える役割が与えられている。

(譜例18) 大きな古時計10~14小節

L18-3 ドナウ川のさざなみ (連弾) (譜例19)

I短調、ABAの3部形式である。B部分はハ長調に転調する。Primoが主旋律を担当し、Secondoはワルツのリズムの伴奏である。使用されている和音はIとIV、V₇で、全体的に難易度は高くなく、もう少し早い段階でも演奏は可能である。

(譜例19) ドナウ川のさざなみ Primo

L19-3 小象の行進(連弾) (譜例20)

曲の冒頭に「はぎれよく」と書かれている通り、軽快なリズムの曲である。スタッカートとスラーのついた音の扱いが課題となる。Primoは休符が多いため、正確な拍子感が必要である。最後の6小節(17小節目から)はテンポが遅くなり、両パートとも同じ動きであるため、テンポ変化をしっかりと合わせることを求められる。

(譜例20)小象の行進 Primo 14~22小節

L22-3 ラ・カンパネラ(連弾) (譜例21)

リストの曲の冒頭をアレンジしたもので、名曲に親しむことでピアノ演奏の楽しみを得られる曲である。Primoは左右互い違いに動くリズムが現れる。Secondoの和音にはアルペジオで奏する部分がある。

(譜例21)ラ・カンパネラ

L24-2 今日の日はさようなら(アンサンブル) (譜例22)

連弾と歌または他の楽器のアンサンブルである。前半と後半でPrimoとSecondoの役割が入れ替わる。伴奏は分散和音であるが、左手から右手への受け渡しがスムーズであることが必要である。

(譜例22)今日の日はさようなら 6~10小節

4. まとめ

アンサンブル曲について1曲1曲を分析してきた結果、難易度の点から、2～3曲テキストに配置されている位置に疑問は残るものの、その曲の前までの学修内容の定着に適している曲や、次に出てくる学修内容の導入の役割を果たす曲など、全体として、その曲を学修するのに適切である段階にそれぞれの曲が配置されていることが明らかになった。テキストの前半は基礎の定着の為に、また後半は表現の工夫の為に適した曲が多い。アンサンブル曲をどのように学修課題として扱うか、また、その曲の各パートを学生にどのように配分するかなどは、指導者の工夫次第で柔軟に扱うことができ、それによって学修効果も変化するであろう。アンサンブルの形態についても全パートを演奏するのではなく、例えば4パートの中の2パートだけ選択して演奏することも可能である。学生の学修効果をより高めるためには、演奏表現の技術的内容の指導だけでなく、その学修時期やどのような課題をどう指導するかが大切であると考えられる。現在Ⅱ期⁴⁾で行っているMLでのアンサンブルは、学生同士が互いに協力しながら技術や表現力を高め合い、曲を仕上げ発表まで行っており、大変意義のあることである。しかし、MLでの指導だけでなく、個人レッスンの中でも学生それぞれの進捗状況に応じ、その学生に適したアンサンブル曲をタイムリーに取り上げることも大変有効であると考えられる。ピアノを始めたばかりの頃の学生は、ピアノに対する不安感や抵抗感を強く持っている。アンサンブルをすることにより、ピアノを弾く楽しさや音楽を創り上げる楽しさを得ながら基礎の定着を図っていくことができるであろう。それは更なる学生自身の自発的な学修を促していくことに繋がるのではないだろうか。今後も実践を通して検証し、より効果的なピアノ指導法の研究を進めていきたい。

注及び引用文献

- 1) ピアノ・テキスト編集委員会：幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト改訂版—レッスン24とその応用—，ドレミ楽譜出版社，2014.
- 2) 横溝聡子：保育者養成校におけるピアノ指導法の一考察，郡山女子大学紀要，第54集，89-102頁，2017.
- 3) Lesson 1は導入部であるので、曲数には含めていない。
- 4) 郡山女子大学短期大学部では、Ⅳ期制を取っており、1学年前期をⅠ期、1学年後期をⅡ期としている。
- 5) 中山由里：ピアノ教育の導入期における授業についての一考察—ピアノ学習初心者への講座を通して—，九州女子大学紀要，第44巻3号，76頁，2007.
- 6) 藤原一子：保育士養成・教員養成課程に在籍する学生がピアノ学習において難しいと感じている

- 項目の分析(1)―ピアノ演奏技術【音高】に着目して―、東海学園大学教育研究紀要、第2巻、39-49頁、2018.
- 7) 梁島明子・山崎和子・坂井康子・松井明恵：初等教員養成のピアノ指導についての研究(2)―基礎と応用―：京都教育大学紀要、Ser. A. No. 83、49頁、1993.
- 8) 譜例は全て前掲1)から使用している。
- 9) 前掲1)、28頁.
- 10) 前掲1)、30頁.
- 11) 前掲1)、40頁.

参考文献

- ・松井典子：保育者養成校におけるピアノ初心者のための指導法―Marianne Uszler他著“The Well-Tempered Keyboard Teacher”を参考に―、滋賀短期大学研究紀要、第42号、79-88頁、2017.
- ・後藤紀子：『保育表現技術』に添えるピアノ指導法の予備的研究―保育者養成校における音楽指導の在り方の提案に向けて、和光大学現代人間学部紀要、第10号、77-92頁、2017.
- ・赤井裕美：ピアノを中心とした「保育音楽力」の在り方と養成校の音楽授業に関する考察、湘北紀要、第37号、29-40頁、2016.
- ・坂田直子・山根直人・伊藤誠：保育者養成における音楽的専門性の育成―幼稚園教師へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問し調査を手がかりに―、埼玉大学紀要、教育学部、58(1)、15-30頁、2009.

